二〇一二年一月二八日

炭焼のけむりが靡く谷戸の里　雅流
護摩火いま蒼天焦がす初不動　菜々
地震ありて厳寒の富士揺るがせり　とろうち
炬燵から出るのはいやよ電話鳴る　よし子
蝋梅の日表日裏濃淡に　きづな
弾初は六段社中打ち揃ひ　きづな
探梅行夫の靴跡恃みとす　よし女
水仙郷隠岐の海風通ひけり　百合
瀧音に消ゆる経声寒行者　宏虎

二〇一二年一月二七日

二の鳥居三の鳥居と道凍つる　うつぎ
神楽太鼓打つ青年の耳輪揺れ　よし女
こうのとり雪の田んぼに降り立ちぬ　こすもす
凍土に刺さりしままに鍬立てる　なつき
深雪積み過疎の一村眠るごと　宏虎
初鳩の翔ちて目出度し石畳　菜々
しなやかに首をうずめし冬の鶴　ぽんこ
講演の緊張解ける大嘘　三刀
白面の白山深く眠りけり　花茗荷

二〇一二年一月二六日

水晶の欠片散らして樹氷落つ　うつぎ
スーパーはバレンタインの菓子の山　よし女
凍空に投げ入れしごと匕首の月　せいじ
炭焼き場へと辿りゆく雪間かな　雅流
献立はヘルシーメニュー女正月　満天
鉛筆のスケッチ画めく冬木立　よし子
寒行の激しくたたく辻の鉦　ぽんこ
浮寝鳥男波女波に見え隠れ　花茗荷
煙噴く炭窯の辺に清め塩　雅流

二〇一二年一月二五日

起き抜けの六腑に走る寒の水　菜々
うぐいす餅尾頭見分けつきがたし　ともえ
まつさらの雪に瑞々しき朝日　とろうち
鷺替の太鼓一打に人動く　百合

二〇一二年一月二四日

小豆粥下ろし立てなる夫婦箸　よし女
粉雪や緋袴の巫女小走りに　とろうち
露天湯へ松ヶ枝雪を落としけり　雅流
磴百段登り訪なふ梅の宮　はく子

二〇一二年一月二三日

館寒しくじらの骨の門くぐる　はく子
風呂吹や母手作りの田舎味噌　うつぎ
下校の子待つ母御達寒風裡　治男
こし方の佳きも悪しきも札納む　有香
一燭に笑まふ御仏堂寒し　よし子
寒月や路地横切るは猫の影　宏虎

二〇一二年一月二二日

献奏の尺八揃ふ初観音　よし女
断崖の怒涛に消ゆる落椿　花茗荷
ゆりかもめ水かげろふの橋くぐり　菜々
四温晴れ散歩がてらの寺詣で　はく子
六甲の嶺々たたなづく四温晴　ひかり

毎日句会みのる選・二〇一二年一月三〇日